会報 松門

No. 10
平成 2. 3. 1

・松陰敬仰の気運醸成
・松陰精神の継承普及
・松陰教学の研究振興

○編集発行　財団法人松風会
〒753　山口市大手町２－18
山口県教育会館内 TEL 0839(22)1218

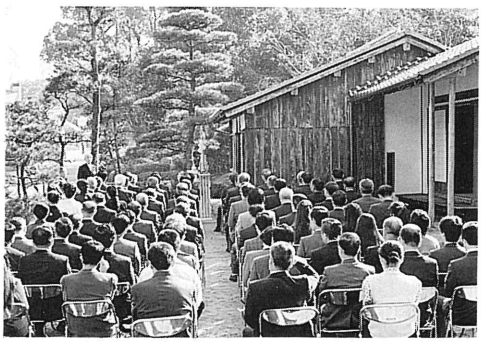
「松下村塾」の模築に思う

山口放送株式会社代表取締役会長
財団法人　山口県教育会会長
野村幸祐

平成元年十一月、萩の「松下村塾」を原型どおり模して山口放送㈱前庭に再建し、同月二十四日、平井県知事、河野県議会議長、高山教育長等々多数来賓の出席を得て、落成披露を行いました。この日は、吉田松陰先生殉難の安政六年十月二十七日（旧暦）から数えて、百三十年目の前日に当たります。

偉大なる先覚者吉田松陰先生は、維新の黎明に先駆けて「松下陋村と雖も、誓って神国の幹たらん」と喝破され、「死して後已む」の気魄を持って、師弟同行、実学の教育を行われました。

この十八畳半の粗末な塾舎から、維新回天の原動力となった幾多の俊傑が輩出し、松門の双璧、久坂玄瑞・高杉晋作などは若くして国難に殉ぜられ、伊藤博文、山縣有朋、野村靖等々、明治新政府の中核となって日本の進展に大きく活躍いたしました。



現在わが国は、世界が眼を見張る経済大国にまでのし上がりましたものの、敗戦と繁栄の陰に、大事な日本人の魂を見失い、道義頽廃、エゴ横行の浅ましい世相に目を覆うもののありますことは、心あるお互いの寒心に堪えないところであります。吉井勇は〝萩に来てふと思へらくいまの世を救はむと起つ松陰は誰〟と歌いましたが、三十歳にして国難に殉じられた松陰先生の、愛国の至情から迸り出る気魄と行動力こそは、我ら意識革命の鑑であり、今の世にあってその精神を学びつつ、反省奮起したいと願うものであります。

この塾舎の模築に当たっては、萩土建河村社長に厳密な調査測量を依頼し、永年悃懇の笹川良一会長にお願いして船舶振興会から一部助成を受け、地元徳山の福谷産業の献身的ご協力によって完成いたしました。

思い起こせば、私は「刑死問題その他を中心とした松陰研究」を、三年がかりで広島文理大の卒業論文としてまとめました。これは、それまですべての松陰先生の伝記には、小塚原と誤記されていた処刑の場所を、日本橋の伝馬獄内とするものであります。なおこの考証の結論は、当時、松陰門下ただ一人の生存者であった渡辺蒿蔵翁（当時九十歳）を萩の自邸に訪ねて、考証の正しいことの要点を、念のため自署頂いたものを巻末に添付しておるのであります。

今やベルリンの堅い壁は打ち砕かれ、自由と平和を求める東欧諸国などの激変ぶりは、我々の予想を絶し、世界変革の歴史が大きく書き改められつつあります。かって尊皇討幕の烈しいノロシに点火されて、幾多の俊傑を輩出したこの松下村塾こそ、六百年の武家政治を、王政復古、明治維新に書き改める日本歴史の大きな変革となったことを考え併せますとき、まさに感慨無量のものがあります。

当社では、かねて放送の公共性と、地域に奉仕する社会的使命に鑑み、利益の社会還元に力を尽くして諸種の事業を推進して参りましたが、村塾の再建も、その根本理念を同じくする一連の社会奉仕による精神作興の「貧者の一燈」であります。

平成二年の本年は、松陰先生誕百六十年に当たり、県をあげて各種の記念行事が展開されることと存じますが、

「只々公明正大、十字街を白日に行き候如くにて天命に叶はば成るべし、叶はずば敗るべし。」

（吉田松陰）

の熱情と信念を持って、松陰精神の復興と、さらに新たな実践を希求してやまない次第であります。

吉田松陰研究　萩松朋会

代表　末永　明

一

昭和四十七年（この年、ルパング島で残存元日本兵が現地警察隊と交戦、一名死亡、一名負傷のまま逃亡の報があった）の夏の頃であったと記憶する。当時萩市明倫小学校勤務の田中浩氏（現萩市教育委員会社会教育指導員元小学校長）他数名の方と教育雑談の集いをした時のことであった。話が、私が私の勤務校の職員研修資料として配布していた松陰全集からの抜粋記事を刷増して、この方々にお届けしていたことに関連して、田中氏から「吉田松陰全集が発行されて手許に届いているから、これを機会に皆で読んでみようではないか」という提案があり衆議一決。早急に実施をと具体策を講じることとなった。

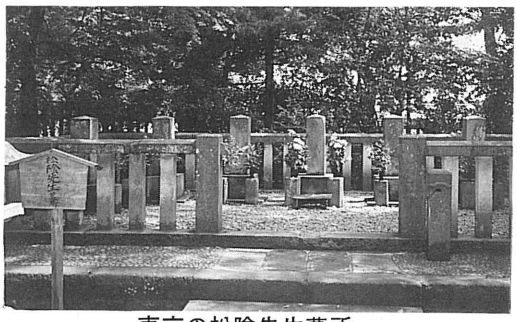
十月には「吉田松陰全集第三巻（講孟余話集録）」が教育会から郵送されてきた。

十一月十一日、前記の書籍を手に、田中浩、横山貢、見好豊、阿武博道、木村浩の諸氏が夜道をおして私の家に集って輪読会の初会を開いた。

この日は、吉田松陰が孟子の講を開いた日にちなんで設定したものであったが、松陰のこの日の講義（註）は、以後の私どもの教育実践をはじめ読書会を継続させる上で、強い心の支えとなるものであった。

〔註〕

吉田松陰全集第三巻一七三頁～。孟子離婁下編第四～八章。『君子と王道政治。仁義と王道の関係を説くにはじまって為さざるの志、為すあるの業（獲者と狂者）に及ぶもので、その根底には涵育薫陶、人を養って善につくことにある』と説いている。



東京の松陰先生墓所

二

以降、田中氏宅と私の家を会場に、概ね月二回、土曜日の夜を集会日として輪読を読けた。

会は、通常、予め決定している章（項目）を全員で朗読。続いて当番会員が講釈。あと（途中にも）参加者は自由に私見を述べ、又は参考資料や文献を紹介するといった過程をたどり、時の経るのも忘れる程であった。

続いて弘長純忠、松田輝夫その他の方々の参加を得、相互に参考図書の持ち寄りや紹介をとおして会は継続せられた。

三

平穏裡に進んでいた読書会の会員組織に思わぬ変化が生じてきた。毎年行われる教職員の人事異動によって、辞令一枚で萩の地を離れて他教育事務所、他教育委員会への転出や、山大附属学校や県教育委員会職員への採用等による人事異動によって、萩市内学校勤務者は僅かに二名という事態が生じるまでに至った。

読書　松陰関係の本「松朋」

しかし、そのような状況の中で（現在もそうであるが）任地と萩の間百余粁の夜道を往復される会員には、実に頭の下がる思いであった。

『この灯を消してはならぬ』と萩市内の学校を訪問して校長先生に「入会勧誘」をお願いしたところ、うれしいことに、教職経験二～三年の若い方々を中心に約二十名の参加を得ることが出来た。この為、会場は個人宅では狭いので萩市中央公民館などの施設を借用することとなったが、この頃から、「松風会」の経済的な御支援を得ることが出来るようになり、会の維持発展の大きな支えとなったことは感謝に堪えないことであった。

会員の構成に大きな変化が生じたので、学習内容をどうするかということが課題となった。

相談の結果、萩市教育委員会（現在は山口県教育会）が発行して市内の小学校児童に配布している「松陰読本」の講話を行うこととなった。

この本は、小学校児童を対象としているため、私ども成人の講読には、それなりの資料の補充が必要となったので、「松陰読本」講読内容に関連する文献を「吉田松陰全集」その他から補完して輪読考察するという方法をとった。この準備は以前からの会員が担当した。読書の過程で会員から、松陰読本の記述中、松陰が東北遊歴から江戸に帰り着いた日付けが間違っているのではないかという気付きがあった。現在の本は訂正せられているが旧本では「丂四十日の旅をおえ、四月四日、江戸に帰った」という記事となっていたことについてのことである。さっそく教育会と連絡して訂正していただいたことなどは、当時

の思い出である。

四

若い情熱をもって松陰研究に取り組まれたこの時期の方々も時が来ると、へき地学校へ又は出身管区の学校等へ転出される事態が生じてきたが、これまた止むを得ない実情である。これらの方々のお名前も忘れてしまって失礼であるが、それぞれの任地で、今尚立派な教育実践をなさっていることを確信するとともに、今後の御精進を心からお祈りしているところである。

松陰の道　歩行大会

いつの頃であったろうか、誰いうとなく「会の名前」をという声があり、松陰研究朋の会の意味から「吉田松陰研究萩・松朋会」（通称松朋会）の名を用いることとなり、同人誌は「松朋」と名付けた。

五

寒い冬の日を雪の下で耐えた麦は春の光の祝福をうけて実を結ぶことが出来る。このことばは私どもの会にも通じることばであった。

他管区で教育実践の成果をあげられたかっての会員が、それぞれの肩に重責を負って再び萩の地に職を奉ぜられる時がやって来た。再会は読書会の再開にも通じたが、一部の者は既に教職を退いていた。現職に在る者と実社会に在る者との会合は、会話を豊富にし相互に刺激しあって以前と違った雰囲気の中、幅広い話題が交わされるようになった。

六

こうした話題の中で「地域の人々にもっと松陰に関心をよせていただく方法はないものだろうか」という発言がなされるようになった。松陰は只単に学校教育にかかわる者が関心をよせればよいものでなく『松陰の心をいまに生かす風土』の醸成を希っての発想であった。そのためには「松朋会」が地域への呼びかけの中核となるとの確認の上で、萩市民を対象として「松陰読本を読む会」の開催を企画することとなった。

吉井　勇　詩碑

発足に当たっては、萩市教育委員会の御支援によって萩市公報紙「はぎ」で会員募集を行うことができ、山口県教育会萩支部の御後援もあって老若四十余名の会員を得ることができた。

初会の平成元年六月の開催当日は、県教育会常任理事（元萩市教育長）井町新熊先生の「松陰を育てた杉家の家風」と題した御講義によって、会の方向付けをしていただくことが出来た。

この会は、以前若い先生方と行った「松陰読本を読む会」の反省の上に立って、月二回夜間の会合とし、松朋会員が吉田松陰全集から関係資料を抜粋配布輪読して内容を深めることとしているが、会員の中には、松陰の足跡を訪ねて各地を巡歴しておられる方々もあり、発言の一言一句が私どもの心を打つものがあり、予定の一回二時間は予想外に延びるのが実情である。

昨年秋実施せられた「松陰の道歩行大会」（教育会主催）には、この会から三十余名が参加したが、七十歳を越えた会員が萩から涙松を過ぎて佐々並までの二十粁に及ぶ山路を踏破、意気軒昂のところをみせて下さったのは誠に有難い限りである。

七

読書会をはじめてから何年になるかな、とふと思い返す時、あの人が転任し、あの人が入会して、今日まで続けることが出来たことに、会員の不屈の努力に自ら驚いている。その間、この北僻の地までおいで下さった松風会の三輪先生、山大附小元校長吉元先生はじめ、支えはげまして下さった皆様に心から感謝しますと共に、今後、もっと年若い方々への入会勧誘の輪を広めなければならないと考える今日この頃である。

八

読書会での参考図書の一部を掲げると、○吉田松陰全集特に第三巻（講孟余話）○講孟余話の研究（玖村敏雄・西川平吉著大阪新聞社）○吉田松陰（玖村敏雄著・岩波書店）○吉田松陰の研究（広瀬豊著・至文堂）○松陰読本（山口県教育会・萩市教育委員会）○孟子（上下・小林勝人訳注・岩波文庫）○孟子（金谷治釈・朝日新聞社）他

前略「吉田松陰の甦る道（中）」贈呈いただき誠に有難うございました。

私共は来年五月、青森市安方緑地公園内（アスパム側）に松陰先生の県内の行程図を赤御影石、巾三・三米に記入し白御影石を台座とし高さ二・五米で完成させます。募金したところ一人で、百八十万円の会社社長あり、市役所も五十万円、青森銀行頭取の参拾万円など大口もありました。

右御礼傍々御伝えまで　敬具

十二月二十三日

青森県歴史の道整備促進協議会

事務局長　漆畑直松

松風会幹事長　松永祥甫様

吉田松陰先生殉難一三〇周年記念

「松陰の道歩行大会」

山口県教育会　大田恭次

平成元年が吉田松陰先生の殉難刑死から数えて一三〇年に当たるところから㈶松風会、㈶山口県教育会、山口県子ども会連合会、小・中・高ＰＴＡ連合会の共催のもとに記念行事として「ふれ合い出合い萩往還歩こう大会―松陰の道歩行大会」を十月二十二日（日）に実施した。

松陰先生刑死の十月二十七日に先立つこと五日、快晴の空、汗ばむような温い日だった。

午前八時半、萩駅には七〇名、山口県教育会館には五〇名が参集して出発式を行い、隊伍を組んで出発した。中には七十歳を越えた高齢者、三歳の坊やを連れた母子連れもまじり、「松陰の道歩行大会」の幟を押し立てて元気一杯、歩行を続けた。

出発式

途中の天花畑から防府高校山岳部十数名、夏木原からは下関市万歩クラブ会員六十余名、萩方面の明木からも数名の参加があり、総勢二百名を越える人数にふくれ上がった。

先頭には松陰研究に詳しい案内人を配し、後尾には山登りのベテランをつけて安全を期した。

萩往還が「歴史の道」として往時の面影をできるだけ留める形で昭和六十三年に整備完了して以来、この道を歩く人の数は次第に増え、道々の管理も行きとどいていることはまことに喜ばしいことである。要所要所には案内の標識や説明板が立てられ、立ちどまって読みながら歩けば、その時代にかえり、様々な感懐も湧いてくる。

萩方面からの主な旧跡としては涙松跡、悴坂（かせざか）一里塚跡、大屋刑場跡、悴坂駕籠建場跡、馬頭観音、市橋跡、町田梅之進自刃の地などと続き、一升谷の石畳道に出て根の迫橋跡、中の峠下の一里塚、落合の橋跡などを経て佐々並市に至る。

途中風景

山口方面からは天花観音堂、六軒茶屋の一ノ坂建場跡、キンチヂミの清水、板堂峠、国境の碑を経て夏木原口屋跡に出る。更に上長瀬一里塚、首切れ地蔵、日南瀬（ひなせ）の橋と続いて佐々並市に至る。

これらの跡地にはその由緒を概説した説明板が立てられており、歩行隊は立ちどまっては読みながら更に詳しい説明を案内人から聞く。案内人はまた、これらと松陰先生との関係やその時の先生の境遇や感懐にも説き及ぶのである。

先生はこの道を四往復している。当時、隣村に足を運ぶのさえ稀であった時代に江戸や九州に向けて四往復もしたということは異例のことであり、その行動のすさまじさを伺わせることである。そして最後は安政六年（一八五九）五月二十五日、江戸送りとなって萩を出られたまま、帰らぬ旅路となったのである。そしていよいよ萩の町と別れる涙松において

帰らじと思ひさだめし旅なれば　ひとしほぬるる涙松かな（涙松集）

と詠み、さらに道を進んで夏木原にさしかかった時、

途中風景

五月二十五日
吾を縛し台命（だいめい）もて関東に致（おく）る
簿（ぼ）に対し心に期す、昊穹（こうきゅう）に質（ただ）すを
夏木原頭、天雨黒く
満山の杜宇（とう）、血痕紅なり（くれない）

の詩を残している。（縛吾集）

これより前、安政元年（一八五四）十月二十四日、下田踏海に失敗して江戸から萩へ護送された時、萩を去る二里の明木橋まで帰り着いたとき、

少年志すところあり
柱に題して馬卿を学ぶ
今日檻輿の返
是れ吾が　晝錦の行

と意気軒昂、錦衣帰郷の心境を歌っている。（松陰詩稿五十七短古）

これらの詩歌について先導の案内人が感慨をこめて解説したことはもちろんである。特に夏木原では詩碑を建立した㈶松風会の松永理事長や三輪理事から建立の経緯を含めて詳しい解説があり、参加者の中の鴻峯吟詠の有志による合吟が朗々と吟じられ、参加者一同を感動させたことである。

萩往還についてこれらの他に松陰先生が書き残しているものとしては東遊日記の中で山口に

至り亀山、鵠峯に登る記事（嘉永四年―一八五一）や三田尻に至り警固町飯田氏に投ず（嘉永六年―一八五三）とあるくらいでその他はあまり見当たらない。

何回も萩往還を往復しながら道々の描写や感懐が意外にも書き残されていないのは、道を歩きながら心は常に往還の先に馳せられていたからであろうか。そしてゆく先々にあっては血のにじむような勉学と火を吐くような行動が次々と繰り広げられている。

萩往還を歩く時、松陰先生が往復した時々の旅先での言動がどうであったかを思い巡らしつつわが思いとして歩を進めるならば一層感興を添えるであろう。案内人は説明の中で随所にそのことに触れていった。

一足おくれて到着した山口方面からの歩行隊も合流し、佐々並中学校体育館を一杯にして十三時四十分からふれ合い交歓会がはじまった。

交歓大会

松永理事長挨拶のあと県教委中島指導主事のリードで、まず鴻峯吟詠の藏重さんのすばらしい朗吟、防府高校山岳部による校歌、中島指導主事の吉田松陰（作詞・星野哲郎、歌手・尾形大作）の歌の歌唱指導と続いた。

交歓大会

最後は地元佐々並地区有志による松陰詩歌の朗詠、朗唱、若松金次さんの舞踊「吉田松陰」、山本幸作、山根敏市両氏による書道吟、佐々並詩吟クラブや若松扇の会や明木舞踊クラブの皆さんによる松陰詩歌にあわせた吟舞踊など多彩な演芸が披露され、きわめて盛会裡に会を閉じ名残りを惜しみつつ来年を期して散会した。

吉田松陰先生殉難一三〇周年記念

青年教師松陰研修会 有意義に終わる

松陰先生殉難時の年齢とほぼ同年齢の三十歳までの青年教師五〇名（小―25、中―15、高―10）の参加を得て松陰先生殉難一三〇周年を記念する松陰研修会は八月十七―十八日の両日、萩青年の家で開催された。

開会式において㈶松風会理事長松永祥甫は激動する内外の諸情勢の中で先覚者松陰の生きざまやその教育精神に学び、青年教師としての使命感を自覚することの重要性を強調した。

続いて講義に移り、まず地元の松陰研究家、松田輝夫先生から「至誠を貫いた松陰の生涯」と題して講義があった。その内容は松陰先生の生涯を兵学修業・師範時代、野山獄時代、幽室・松下村塾時代、再獄・殉難時代に分け、詳しい資料を用意しての熱情こもるものであった。

次いで元萩市助役で松陰研究家、井町新熊先生の「松下村塾の教育について」の講義では開塾と変遷、門人、村塾教育の基調、村塾の日々という項目のもとに多くの事例や言行を引用しての講義であった。特に「人の師となる者は自らを高めねばならない。教育は涵育薫陶、自ら化するものであり、人は一二の才能のなき者はない」という松陰先生の教育観を説かれた。

松陰生誕地での記念撮影

更に山口女子大学河村太市先生の「吉田松陰の人間観、人生観」の講義では、孟子の「惻隠の心、羞悪の心、是非の心、辞譲の心」の四端説や性善説を根本に、卓然自立などの人間観を説明されると共に志気、至誠、人物観、死生観にわたって松陰先生の人生観を解説された。

第一日の講義終了後、貸切バスで松陰神社参拝、宝物殿拝観東光寺裏の杉家、吉田家の墓地、松陰生誕地を訪れ、最後に萩市史料館を見学した。特に生誕地からの萩市展望の絶景に、幼少期の松陰先生の生活を回想した。

夕食後、小・中・高校の各グループ毎に懇談会を行い、青年教師としての悩みとか問題点、更に「今なぜ松陰か」等について語り合った。

第二日はこの研修会の総括として松陰研究の碩学三輪稔夫先生から「教育改革の原点―松陰教学の真髄―」という指導講話があった。幕末国家存亡の際、松陰先生が歴史の限界にいどんで精進した実践の**実学**と事（時）務を知る**俊傑の学**の精神が教育改革の原点であると教えられ、松陰研究の今日的意義を説かれて、充実した研修会を終了した。

三輪先生の講話を聴く

松陰をめぐる人びと(9)

―宮部鼎蔵―

熊本大学非常勤講師
元　熊本市文化課長
熊本市新屋敷1-3-19
鈴木　喬

生い立ち

肥後勤王党の総帥として知られた宮部鼎蔵は、文政三年（一八二〇）四月、上益城郡七瀧村（現御船町）田代の医者宮部春吾の嫡男として生れた。宮部家は細川藩士の分家で、代々仁術を施す医を業として来たので人々の尊敬を集めていた。

鼎蔵は嫡男として、当然医業を継ぐものと考えられ、きびしく育てられた。九歳のとき祖母に伴われて熊本の叔父の家に仮寓し、文武両道の修業に励み、さらに十三歳になると藩校再春館（医学校）師範役の富田家の蒼莨塾で医学の修業に入った。

しかし鼎蔵は医業を継ぐよりも武士として家を興したいと考え、父の許しを得た。折しも末の叔父丈右衛門が藩の山鹿流軍学師範役に在り、鼎蔵を見込んでくれたので、天保八年（一八三七）鼎蔵はこの叔父の家に住み込んで軍学に精進することになった。ところが好事魔多しの例え通り、丈右衛門は鼎蔵を養子に据えて間もない同十一年九月に世を去った。そこで鼎蔵は軍学師村上伝四郎について引続き学ぶことになった。

弘化二年（一八四五）村上伝四郎は藩の師範役となり、嘉永二年（一八四九）には鼎蔵がその跡を継いで師範役となった。三十歳の鼎蔵はこの年妻帯し、内坪井に居を構えた。以後彼の軍学師範在職は安政四年二月まで八年間にわたった。彼の諱は増實で、号を田城と称している。

松陰との親交

嘉永三年の秋、松陰は西遊の旅に出て、十二月九日に熊本を訪れた。このとき松陰と鼎蔵はじめての出会いであったにも拘らず、池部父子や荘村小兵衛を交えて二日間も時勢について語りあい、以後刎頸の交りを結ぶに至った。その翌日、松陰は熊本城を見学して北に向ったが、一日の中に九里を歩いて肥猪（現南関町）に泊った。このため熱発して足もまめだらけになったが、「唯熊府人と議論して資益多く、気性溌活此に至ることを得たり」と日記に記している。このときの宮部・池部らとの会談が、如何に彼の心を鼓舞したかを知ることができる。ときに池部啓太郎五十三歳（数学・砲術師範）・宮部鼎蔵三十一歳（軍学師範）、松陰二十一歳であった。

翌四年、鼎蔵は家老有吉市郎兵衛に随従して出府し、五月には山鹿素行の子孫同苗素水に入門して、兵学に磨きをかけた。このとき松陰もまた兵学研修のために出府し、同じく山鹿素水の塾に入門した。再会を喜んだ松陰は早速肥後藩邸に鼎蔵を訪ね、六月には二人で房総地方十泊の旅に出ている。江戸に帰った鼎蔵は、旅行記とともに房総沿岸海防図を画いて成果を復命した。江戸に帰った鼎蔵は、松陰に鳥山新三郎を紹介され、彼とも親交を結ぶに至った。

同年十二月十五日、鼎蔵は再び松陰をさそって東北地方への旅行に出発した。とくにこの日を選んだのは、赤穂浪士が本懐を遂げた幸先よい日ということにあった。二人は二十四日に水戸に着き、この地の有志達と交わりつつ年を越した。

翌五年正月二十日、両人は水戸を発し、白河の関を越えて会津に入り、越後から佐渡に渡って順徳天皇の山陵を拝した。転じて出羽国を北上して寒沢津に至り、津軽海峡を隔てて松前を遠望した。このあと仙台・米沢・会津を経て日光に至り、四月五日江戸に帰着し、鳥山新三郎の蒼龍軒に旅装を解いた。

松陰はこの旅行の手続不備によって帰国謹慎を命ぜられるが、しかしこの頃から、鼎蔵の幼年時代に厳しい躾を続けた祖母のらくが寝つき、手厚い看護も効なく、翌六年二月に八十一歳でなくなった。鼎蔵はここに実父母・養父・祖母をすべてなくしたが、その存命中の孝養も死後の追善も、誰もが感じ入る程であった。その篤行が藩庁に聞えこの年四月藩より孝子として表彰を受けた。松陰も鼎蔵の孝心には感嘆し、後に松下村塾の講義の中に第一の事例として挙げている程である。

宮部鼎蔵邸跡

松陰との永訣

嘉永六年、松陰は十年間四方遊学の許可を得て江戸に出た。同じ頃、鼎蔵は熊本の隠れた大学者林桜園の原道館に入門し、国学を専攻することになる。もともと宮部家の医学の師富田家は、肥後勤王の三哲と称せられた日岳（大風）から父山・龍陽と続く勤王の家系で、その薫陶を受けた宮部家も当然勤王の志が厚かった。それは外国船の近海遊弋に対する危機感と相俟って、当然尊王攘夷の思想となり、日本古来の国学の蘊奥を極めること

になったのである。

この年六月には米国のペリーが浦賀に、七月には露国のプーチャチンが長崎に来航し、ともに通商を求めた。江戸にいてこの情報を得た松陰は、九月西遊の途につき、十月再度熊本に足を入れた。彼は熊本で宮部を中心とする勤王党と横井小楠を中心とする実学党と会談して、二十七日長崎に達してみると、露艦は既に去り、彼が心密かに抱いていた露艦に便乗して海外に渡航しようとの計画は挫折した。彼は再び熊本に帰り、宮部・横井と会して萩に帰った。

翌安政元年（一八五四）正月、鼎蔵は兵学修業として相州出張を許され、十九日浦賀から江戸に帰り、異国船碇泊の状況を報告した。ペリーの艦隊は沖縄で越年して、年明け早々に再び浦賀に姿を現わしたのである。あわてた幕府は、遂に三月三日米国と和親条約を結び、下田・箱館の開港を約した。これを聞いた松陰は、海外の実情を自らの目で視察して時勢に対処したいと考え、米艦に便乗して渡航することを決意した。同五日の朝、宮部鼎蔵以下胸襟を開いた肥後人士にその意志を述べ訣別した。

宮部鼎蔵墓

鼎蔵はそれは詭道であると止めようとしたが、松陰の決意の固いことを知るとやむなくこれに同意し、自分の佩刀を脱して松陰と交換し、また自らの大切にしていた藤崎八旛宮の神鏡を贈り、「皇神の真の道を畏みて思ひつつ行け思ひつつ行け」の一首を餞した。

三月二十七日、松陰は国禁を犯して米艦に漕ぎつけたが、拒絶されて海岸に送り返された。浦賀奉行所に自訴した松陰は、江戸の伝馬町の獄に投ぜられ、その企を賛助したということで、鼎蔵も幕吏の取調べを受けた後、国元に返された。同年松陰は藩の獄に送られたが、翌年正月には「思友詩」を草して、宮部鼎蔵・佐々淳次郎・永島三平の三人を推重し、安政六年刑死するまで数度にわたって獄中から手紙を送って志を通じている。

勤王活動と池田屋の変

安政三年五月、鼎蔵の身辺に大事件がおこった。宮部の愛弟子丸山勝蔵と愛弟大助（春蔵）らが、藩士の子弟と乱闘し、双方が手傷を負ったのである。翌四年の判決では、藩士に対して軽輩が無礼を働いたということで、丸山は死罪、大助は三年の刑に処せられた。鼎蔵もまた軍学師範役の地位を失い、郷里七瀧村に引籠った。食禄のない七瀧の生活は苦しかった。彼は自ら耕し、細工物をこしらえて熊本に鬻ぐという生活が続いた。

その間に天下の形勢は目まぐるしく変転し、安政の大獄で松陰は死に、大獄の発頭人井伊大老もまた万延元年（一八六〇）桜田門外の雪を血で染めた。この頃から諸国の志士の来熊多く、いずれも肥後勤王党の奮起を促すものであった。同志の要請を受けた鼎蔵は、文久二年（一八六二）正月玉名梅林の松村深蔵を伴って上京し、中山大納言や田中河内介から情勢を聞き、京師の状況を目のあたりにした。帰国した鼎蔵は同志達に京洛の形勢を説くとともに、藩に対して建白書を提出した。

しかし大方の諸藩は公武合体論であり、尊王派と見られた島津久光すら勤王派の藩士を寺田屋で誅伐する程であった。肥後藩も同様であったが、再三にわたる勤王派の建白と、朝廷よりの繰返しの書状によって、遂に重い腰をあげた。同年十一月公子護美が宮廷警備のために上京すると、鼎蔵はその先発を命ぜられ、護美の帰国後も京に残された。

翌三年三月、朝廷に諸藩貢献の御親兵ができると、総帥三条実美は鼎蔵をとくに選んで全軍の督事とした。八月十三日には大和行幸・攘夷御親征の詔勅が下ったが、同十八日の政変で尊攘派は一夜の中に追放され、七卿落となった。鼎蔵も長州に下って三条卿の傍にあったが、元治元年の蛤御門の変で長州藩は朝敵の汚名を蒙った。鼎蔵は座視することができず、京に潜入して政局の転換を画策していたが、その行動を新撰組に探知され、六月五日京三条の池田屋で非命に倒れた。四十五歳であった。

事務局通信

平成元年度の事業は第九号に掲載の通り吉田松陰先生殉難百三十周年記念として県教育会と共催で実施予定通り終了した。

平成二年度主要行事計画

松陰先生生誕百六十年記念として県教育会と共催で行う。

・会報「松門」十一～十二号発行・配布
・吉田松陰の甦る道（下）刊行
・吉田松陰テーマ展　七～八月
・県内「吉田松陰の道」歩行大会　十月中・下旬
・組曲「吉田松陰」演奏会　十二月下旬　宇部市
・松陰精神普及・顕揚大会　八月八日　山口県教育会館
・山口県学校吟剣詩舞道大会　八月十一日　山口県教育会館
・松陰研究家論説集編集配布　刊行十二月
・県内「松陰の道」ガイドブック編集配布　刊行十月
・青年教師松陰研修会開催　八月中旬　萩青年の家
・松陰教学研究会開催　十二月上旬　山泉荘
・吉田松陰の甦る道（上）（中）は一冊四百円で領布中

資料展示室

吉田松陰先生関係図書

（つづき）

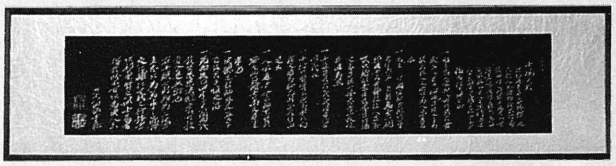
・維新の先達　吉田松陰　田中俊資　松陰神社維持会　昭63
・吉田松陰の生涯　吉田寅二郎　大雅堂　昭62
・松陰教学シリーズⅢ　吉田松陰の甦る道（中）（財）松風会　平1

その他

（つづき）

・日本語大辞典　講談社平1
・絵図でみる防長の町と村　山口県文書館　平1
・防長文学採拓行（芭蕉編）　西村勇　平1
・蒙談　第八～九号　蒙談会　平1
・益友　村尾福乗　益友会　平1～2
・広島県に住んでおられた吉田松陰研究家・松陰先生資料収集家故好永忠行先生（平元・三・一九日逝去）のご遺族財満澄子様から山口市歴史民俗資料館を通じて多数の貴重な資料のご寄贈をいただくことになっている。

◀吉田松陰肖像　田中栄一氏寄贈



士規七則

吉田松陰遺墨三点色紙

◀月性詩拓本

◀妙円寺月性肖像

◀浮屠清狂伝肖像

◀作詩不欲為月性詩

◀橋本景岳賛肖像　篠原房江氏寄贈

上記4点は僧月性顕彰会柳井市郷談会寄贈

教育会館のホールをご使用の時、来賓控室・役員控室等にお困りの場合は、展示室を無料でご使用いただいておりますのでご遠慮なくお申し出ください。

（編集後記）

・野村会長には永年の松陰研究から、次の世代の人間形成には松下村塾の模築が重要であるとの観点から、それを実践に移された熱情と今後の活用の抱負を述べていただきました。
・人吉市吉澤先生を通じてご紹介いただいた鈴木喬先生にはご多忙なお身でありながら、熊本県の先覚、松陰の友人宮部鼎蔵について松陰とのかかわりの上から詳細に蘊蓄を記していただき感謝の至りです。
・萩の松朋会の歩みについては最初からのいきさつ、困難を克服しての研究の継続等を書いていただきました。益々のご発展を祈ります。
・大田先生には、吉田松陰先生殉難一三〇周年記念事業の中特筆すべき「松陰の道歩行大会」「青年教師松陰研修会」についておまとめをいただき感謝します。（谷口）